

課題はシェイクスピア、三島、チェーホフ!

オーディションは、10人強のグループごとに行われた。まず、ウォーミングアップをしてリラックス。ゴールド・シアター講師の、ヴァイス担当やまととのりこ、ムーブメント担当桜井久直、ダンス担当広崎うらん、日本舞踊担当花柳輔太朗などによる、ダンスや体操で緊張した体に酸素と血を行き渡らせる。固まって、会場に入って来た人たちの顔に笑みが浮かぶ。

そして、いよいよ、演技を発表。“生活者の実感”を表現してもらうために蜷川が選んだ課題戯曲は4本。女性用にチェーホフ『三人姉妹』の長女の台詞と三島由紀夫『近代能楽集～卒塔婆小町』の老婆の台詞、男性用にチェーホフ『三人姉妹』の医者の独白、シェイクスピア『リア王』のリアの独白。いずれも、蜷川が舞台演出を行ってきた作品だ。この中から、ひとつを選んで演じる。

「プロフェッショナルの俳優の真似をする事はありません。台詞の中に、自分の記憶の中で気になることがあれば、それを語つてほしいんです」。

蜷川は説明した。

たとえば、『三人姉妹』の台詞には「生きていきましょう」という切実な呼びかけや「存在しないものであつたらどんなにいいか」という悲哀がある。55年以上生きてきた人たちが、これらの言葉を語る時、何かたくさんの記憶が言葉に付着し、思いがけない重みや深みを感じさせる瞬間がある。他の台詞や動きがたどたどしくても、台詞とその人の実感がふと重なった時、バッとスポットライトが当たるよう空気が変わる時があるのだ。哀しさだったり怒りだったり強さだったり、皮革製品が使い込まれ独特の風合いをもつような表現が。余談ではあるが、昨年春、蜷川の若者たちの演劇研究の場ニナガワ・スタジオのオーディションに年輩の女性が参加していた。受講者の母親くらいの年齢の女性だったが、彼女が清水邦夫の戯曲『明日そこに花を挿そうよ』の中の「生きているものは醜いわ」という台詞を語った時、しみじみした哀感が漂い、心が震えたことが忘れられなかった。その女性は、今年、ゴールド・シアターのオーディションにも姿を現していたという。若さという価値基準だけでない表現の可能性の門戸が開かれることは、日本の文化にとって大切なことだと思う。



『三人姉妹』を一斉に朗読させた



こっちは、楽隊の音楽が鳴ってますと状況を説明する蜷川。
本当に、スピーカーから楽隊の音楽が鳴る



白樺の木の代わりに棒を立てる。妹2人も傍らに置いて演技

時に厳しく、時に優しい蜷川Eye

蜷川は毎日、毎日、目をこらし、その人の人生を、わずか数分の台詞の中から発見しようと挑み続けていた。ある時、蜷川が、課題を読み終わった人たちを集めて、一斉に『三人姉妹』のくだりを朗読させたことがあった。「自分の存在をかけて言ってください。もっと心の奥にある気持ちを出して、自分の人生がなんでもなくて忘れられてしまう…涙が出るほど辛い人生なんだ。そのために、お年寄りに会いたいんだ」。蜷川自身が強烈に切実に叫んでいた。そのアジェーションに引っ張られて、次第に高まる蜷川ギリシャ悲劇のコロスのような合唱。「蜷川さんが、10人のひとりひとりをちゃんと見ているのがわかるんですよ」とひとりの応募者は興奮の面もちで語った。

応募者は、それぞれに何か表現をしようと試みる。衣裳に工夫をする人、モデルガンを持ってきてつきつける人、小道具の洗面台を倒して水をぶちまける人……。

SAITAMA GOLD THEATER



観客の目の目を意識して芝居を作っているという蜷川。
まさに千(以上)の受験者の目と向き合ったオーディションだった



洗面台が小道具として置かれる。
この後よりリアルに椅子が何脚も用意された



蜷川のアドバイスで演技がガラッと変わるもの

**2006年4月21日、
48人ではじまりました。**

写真の撮影は Arnold GROESCHEL
オーディションは彩の国さいたま芸術劇場小ホール、3月15日に行われたものです。

木俣 冬(きまたふゆ)
演劇、映画を中心に、プログラム編集、雑誌記事執筆等を行う。キネマ旬報社「アクチュアル」にて俳優ドキュメントの連載を開始。「問違いの喜劇」「タイタス・アンド・ロニカス」のプログラムも編集した。

やってみたいと思っていたし、「流行通信」で、老人に辻村ジュサブローさんの衣裳を着せるという企画をやったこともあるんですよ。企画に当たって、まずはぼくの親父とお袋に、おじいさんとおばあさんがやるハムレットとオフィーリアをやってと頼んで怒られたんだけど(笑)」。

カントールやビナ・パウシュの65歳以上のカンパニーのもう一つは、5月12日から行われる『videodance 2006』のプログラムに入っている。海外の、年を経た生活者の第2の人生がどれほど力強いのかも興味深い。

蜷川はどんなメンバーを選ぶのだろう。この試みは、蜷川自身が70歳を越えて、もう一度自分の人生を破壊し再生する果敢な試みだ。蜷川と共に走ることは、かなりの覚悟が要りそうだ。なにしろ、オーディション期間中は、朝6時に起き、9時半からオーディション、午後から舞台の稽古、さらに移動して夕方からもう一本の稽古などというハードスケジュールを毎日こなしていた70歳だ。

「春を感じる余裕もなかった」と笑う蜷川はオーディション最終日には、さわやかなブルージーンズをはいていた。ゴールド・シアターの春はこれからはじまる。

おかげ、雰囲気作りをした。そのため、彩の国さいたま芸術劇場のプロのスタッフが、オーディションに参加していた。なるべく緊張をとろうと、スタッフにスーツ姿をやめさせたり、審査員〇〇〇〇と肩書きを書いた紙を審査席につけるのをやめたり、さりげない気配りも。たくさんの人たちと芝居を作ってきた演出家の視点というのは、こういう細部にまで行き渡るのだなと思った。緊張で台詞がとんでもしまった人には、「読んでもいいですよ」と、ふだんの稽古では考えられない優しさを蜷川は見せた。「コワイというイメージだったのに、とても紳士的で優しかった」と応募者は感想を述べた。

応募者は、それぞれに何か表現をしようと試みる。衣裳に工夫をする人、モデルガンを持ってきてつきつける人、小道具の洗面台を倒して水をぶちまける人……。

念願だった老人の劇団

オーディションを終えて帰る人たちは皆、熱が冷めないようすで、「受かったら、一緒に住もうって話をしたんですよ」とか「受からなくとも、一年後に会いましょうって連絡先を交換しました」などと盛り上がっていた。「こんなふうに新たな出会いをする機会は滅多になくなっているので、新鮮だ」と目をしばつかせているのは、昭和4年生まれの女性。女学校の時に、演劇をやって味わった舞台に立つ感動が未だ忘れられなくて、北海道からやって来たのだそうだ。その場にいた方達は、何かしら表現に興味をもって、能を習ったり、地方でミュージシャン活動をしたりしているという。まさに、『三人姉妹』の「私たちの人生はまだ終わってはいない。生きていきましょう」の世界がそこにあった。

オーディションの合間に、蜷川は、ビナ・パウシュが65歳以上の男女を集めダンスを行っているという話をしていた。「みんなすごく元気なんだ。ツアーのバスの中ではしゃいでいるんだよね」と。もし、前述の応募者たちが合格して本当に一年間共同生活をはじめたら、不思議な人生が立ち上るかもしれない。

蜷川は、老人劇団の構想は、昔からもっていたそうだ。

「ポーランドの演出家タデウシュ・カントールみたいなことを